

保育計画成果報告書

法人名等	社会福祉法人 幸生会
施設名	幸町すいせん保育所
報告者（役職）	鳥居 茂子（所長）
住所・連絡先	仙台市宮城野区幸町3丁目12-18
	☎ （022）385-7530
	E-mail saiwai@f-kouseikai.or.jp

○タイトル（保育計画）

心身の成長を育む為の運動遊び

○主な助成備品

巧技台Bセット、巧技台ワイド用ジャンボすべり、巧技台大柶ピンク、巧技台収納台車
セフティジャンピング

1. 保育計画策定の目的

幸町すいせん保育所は、仙台市の待機児童対策の一貫である三歳未満児専用保育所の第一号として設置されました。三歳未満児だけの保育を通して、改めて小さい子ども達は、運動機能の発達が、言葉や意欲、自信に繋がるという事を強く認識し、運動遊びの大切さを実感しました。

平屋造りで、中庭はありますが、固定遊具を置けるような広い園庭はないため、固定遊具で遊ぶ機会が殆どない子ども達のために、広いホールや中庭、近くにある消防学校のグラウンド、公園などを利用して様々な工夫を凝らしながら保育を行ってきました。幼児運動指針に載っている動きに照らし合わせていくと、経験不足になる動きがあり、子ども達の発達を保障していく為には、環境を整えていく事や意図して遊びを取り入れていく重要性を感じました。

子ども達が、日々の保育の中で、遊びを通して様々な運動機能を発達させ、意欲や自信、楽しさなどの非認知行動を育みながら、心身ともに健康な生活ができる土台作りを目的としました。

そして、その為に「遊びを通しての感覚統合と子どもの発達」について、職場研修で専門の講師を招いて学び、子ども達のからだの仕組みや発達との関係について職員全体で周知を行い、取り組んでいきました。

2. 具体的な実施内容

< 0 歳児 >

用具名	子どもの姿	
セフティジャンピング	4 月～8 月 ・マットの上に座ったり、寝転がったりして揺れを楽しむ。 ・保育士と手を繋いだり、一人で立ち、バランスを保って揺れに耐えようとする。	9 月～12 月 ・マットの上で足踏みをしたり、歩こうとする。 ・保育士の「かえるがぴょん」等の言葉掛けを聞いて、ジャンプをしようとする。ジャンプをする事はまだ難しいが、しゃがんだ体勢から全身を伸ばし楽しんでいる。
		
ワイド滑り面	・鈴を鳴らし呼ぶと、斜面を這い這いで登ろうとする。足の力が弱い子は、登るのが難しい様子だったので、お尻を支え登れるようにしていく。	・殆どの子が、補助がなくても意欲的に、斜面を這い這いで登れるようになる。 ・滑る際に、お尻をついた状態や腹這いになり、様々な体勢で滑る事を楽しめるようになる。
		

< 1 歳児 >

用具名	子どもの姿	
梯子	4 月～8 月	9 月～12 月
	・頭上を確認しながら、保育士の真似をして、這い這いで梯子をくぐったり、梯子の間から顔を出し、空間認知能力を育む遊びの一つとして楽しんでいる。	・保育士と手を繋いで、バランスを取りながら梯子を跨ぐ。歩行が安定してくると、一人でバランスを取りながら、跨ぐ様になる。 ・保育士の真似をして、一歩ずつ慎重に進む。
		
鉄棒	・保育士や友だちの真似をして、鉄棒を片手や両手で握る。 ・足が地面についたまま、身体を揺らし、ぶら下がる事を楽しんでいる。	・両手でしっかりと鉄棒を掴み、腹筋を使って足を上げる。 ・5 秒以上ぶら下がる事が出来る様になる。
		

< 2 歳児 >

用具名	子どもの姿	
ワイド滑り面	4 月～8 月	9 月～12 月
	・ 始めは、這い這いで斜面を登る事を楽しむ。 ・ 保育士と手を繋ぎ、バランスを取りながら登り降りを楽しむ。 ・ 手を広げてバランスを取り、足元を確認しながら一人で登り降りが出来るようになる。	・ 立って登り降りする事にも慣れ、スムーズに進む事が出来るようになる。 ・ 腹這いで頭から滑る際は、始めは怖がる子もいたが、友達の姿を見て挑戦したり、力加減やバランスを調節しながら楽しく滑り降りるようになる。
		
ビーム	4 月～8 月	9 月～12 月
	・ 始めは、バランスが保てない子もいた為、保育士と手を繋ぎ、補助する事で安心して渡れるようにしていく。 ・ 1 段のビームを 2 本設置し、保育士が手本になりながら、横向き歩き、平均台歩きを知らせていく。	・ 回数を重ねる毎に、補助なしでスムーズに最後まで渡りきる事ができるようになる。 ・ 2 段の高さにしたビームを 2 本設置する。2 本のビームを脚を広げながら同時に渡ったり、横向き歩きする等、自分の好きな歩き方で楽しんでいる。
		

梯子	・始めは、またいで渡る事を楽しむ。 ・腿をしっかりと上げて歩く事を知らせると、自分の足元を確認しながら、慎重に進んでいく。 ・傾斜をつけ四つん這いでの渡り方を保育士が実際にやって見せる。	・子ども達の成長に合わせて、傾斜の高さを調節していく。 ・一人ひとりの姿に合わせて、手足の運び方を知らせていく事で、四つん這いで渡りきる子も増えてきている。
	 	

3. その成果と評価

0歳児は、マットの揺れや斜面の登りなど、初めて経験する事が多く、不安になる姿が多く見受けられましたが、大きい子ども達の姿や繰り返し体験していく事で、見通しを持つ事が出来、意欲的に取り組むようになりました。その結果、体幹が鍛えられ転倒が少なくなり自分の体の使い方を知るようになって来ました。

1歳児は、運動機能面では、体幹が益々しっかりし、転倒しても手が出るようになって来ました。運動する事で、空腹感を覚え、意欲的に食べるようになり、生活のリズムが整いやすくなり、そのおかげで体調を崩してもすぐに回復するなど健康な体が育まれました。又、友達への関心も広がってきて一緒に遊ぶ楽しさや、自分も同じようにやってみたいなどへの興味・関心が広がってきています。

2歳児は、保育士がやり方を説明して見せてから、子ども達が、自分で考えて動いてみるという経験を通して、興味が更に育まれると共に伸び伸びと動く事で、様々な動きが身につき、身のこなしも素早くなってきました。又、友達と一緒に遊ぶ事でルールの大切さに気づいたり、コミュニケーションを取ったりする姿が出て来ています。

感覚統合の視点を学び、運動遊びに取り組んできた事で、子ども達の発達や成長を職員全体で確認する事が出来ました。環境を整えていく事の重要性を改めて認識しました。

4. 今後の課題と展望

限られた環境ではありますが、個々の発達をよく捉えていき、助成して頂いた運動器具を有効に活用しながら、様々な運動遊びを今後も工夫して取り入れていきたいと思えます。子ども達の意欲や主体性を大切にしていき、自分の思うように身体を使いこなし、健康な生活を送れるように生きる力の土台をしっかりと築いていきたいと思えます。

以上